

マイクロフィルム版 チェンバレン家文書集について

The Chamberlain Papers from Birmingham University Library

Editor: Professor Peter T. Marsh, Professor of History and International Relations, Syracuse University.

Microfilm 384 reels. 1996-98(Primary Source Media)

原 田 聖 二

61,000点にもおよぶこのマイクロフィルム・コレクションは、チェンバレン家の傑出した人々 ネヴィル、オースティンおよび二人の父ジョセフ の文書を通じて、1836年から1940年の間におけるイギリスの社会的、政治的活動のエッセンスを描き出している。ほぼ4分の3世紀の間、チェンバレン家の誰かがイギリスの国政の中核で活躍していたことになる。そこには、この有名な一家の夫人や姉妹その他の人々の関係資料も含まれている。すなわちこの文書の内容は、まったくの個人的なことから政治・国際問題にまでおよんでいるので、女性史研究家、政治史家、経済史家などを含む歴史研究者にとって、はかり知れないほど豊富で質の高い史・資料の宝庫として強い関心の的となるであろう。このコレクションが19世紀末から20世紀初頭のイギリスはいうに及ばず、世界において生じた多くの問題を詳細に研究するにあたっての絶好の史・資料を提供することは間違いない。

以下華々しい彼らの政治的経歴、業績ならびに人となりを紹介することによって、そこに遺された膨大な史・資料の研究上の価値が明らかになるであろう。なお紹介の順序はマイクロフィルムに従って行うこととする。

Series One : The Papers of Neville Chamberlain, 1869. 3. 18 ~ 1940.11.9.

ネヴィル・チェンバレンは有名なバーミンガムの政治家ジョセフ・チェンバレンの次男、でありオースティンの異母弟であった。彼の公的生活を通じてネヴィルは政治と行政においてプレッシャーを与えられた家族的背景によって影響を受けた。ネヴィルの異母兄、オースティン・チェンバレンは政治家と

しての教育を受けたが、ネヴィルは実業界に身を投じた。彼はラグビー校とメイソン・カレッジで教育を受け、会計士としての道を歩み始めた。しかしそれはバハマ諸島におけるサイザル麻の栽培の失敗による財政的損失を取り戻すために、そこに派遣するという父ジョセフの計画によって中断された。この計画はバハマ諸島の痩せ地とサイザル麻の市場価値の低さとによって最初から失敗は明らかであった。遠いアンドロス島でのプランターとしてのネヴィルの7年間は独り超然としているという彼の性格をさらに強いものにした。

1897年にイギリスに帰国してネヴィルはバーミンガムで金物製造業者として成功し42歳でバーミンガム市参事会員(1911)となり、都市計画委員会議長を務め、4年後市長(1915~6)に選出された。ネヴィル・チェンバレン時代の市政は改革と革新で評判となり、保健と都市改革の分野で重要な貢献をなした。こうした実績がロイド・ジョージ政府によって、彼をして国民勤労管理官(1916~7)に任命させたのである。このポストの不明確な職務と権限と首相への個人的敵愾心とがあいまって、辞任へと導き、ネヴィルとロイド・ジョージの間の生涯にわたる敵対関係を生んだ。

1918年に50歳に近づいてネヴィルはバーミンガムのレディウッド選挙区選出の保守党下院議員として議席をえた。1922年ロイド・ジョージの連立政府の崩壊によってボナー・ローとボールドウィンの下ですみやかな出世の道が開かれた。1年もたたないうちに、チェンバレンは逓信長官(1922~23)として入閣し、続いて大蔵省主計長官(1923)、保健相(1923)となり住宅法、地代制限法を成立させた。彼は第2次ボールドウィン内閣で望んで保健相(1924~26)として多くの社会政策立法を手がけた。

1931年組閣された挙国政府においてチェンバレンは、三たび保健相（1931）を務め総選挙ののち蔵相（1931）に復帰した。そこで彼は一般関税10%の導入と福祉改革を中心として進めるという一連の困難な経済問題を取り扱った。彼の蔵大臣としての立場は再軍備と対外政策をめぐる議論の矢面に立つこととなった。ネヴィルは1935年の総選挙において防衛問題について国民に信を問うよう主張したが、ポールドウィンによって却下された。その主張するところは、再軍備を選択すべきであるし、弱体化したイギリス経済の回復にダメージを与えないように進めようというものであって、ネヴィルはイギリス海軍の拡大を迫った。重要な政策問題をリードするにあたっての彼の効率的行動、ほとぼしるエネルギーそして積極的なやる気はポールドウィンの後継者として彼を印象付けたのである。

1937年首相としてひとたび政権につくとネヴィル・チェンバレンは、彼の経済回復や社会改革の諸計画が、ファシスト独裁者や日本によって引き起こされた平和に対する脅威の高まりに対処する必要によって棚上げされたことを知ったのである。ネヴィルの宥和政策は、交渉と再軍備の二重政策の採用であった。帝国を防衛する必要に直面して、現実的な政策として宥和政策を考えたのである。

宥和政策の頂点はズデーデン地方をめぐる危機のときにやってきた。1938年9月15日のベルヒス・ガーデンでの会合に続いて、再び9月22日ゴードスベルクにおいてヒットラーと会い、話し合いによる解決を求めた。ミュンヘン条約（Munich Pact, 1938年9月30日）は、チェコスロバキアの犠牲でズデーデン地方をドイツに割譲することによって、平和を守ったのである。ナチスのノルウェー征服をイギリスの軍隊が阻止できなかったことが、ネヴィル・チェンバレン政府の崩壊へと導いた。ネヴィルは1940年5月10日にチャーチルに道を譲るべく辞職した。彼は枢密院議長として政府にとどまったし、保守党の党首を務めたがまもなく病気のために辞職し、1940年11月9日にガンのために死亡した。

Series Two : The Papers of Austin Chamberlain, 1863. 10.16 ~ 1937.3.16.

オースティン・チェンバレンはバーミンガムでジョセフ・チェンバレンの長男として生まれ、父の秘書をへて、東ウースタシャーの統一党議員として政

界に入り、のち父の後を継ぎバーミンガム・ウエストの保守党の議席をえた（1892）。

オースティンの政治的経歴は、第1次大戦以前の10年間にイギリス政界において影響力と強い権力をもっていた有名な父ジョセフの影響の下に導かれていた。父の後を継ぐことが期待されていたオースティンはラグビー校とケンブリッジ大学で教育を受け、1892年に政界入りしたがチェンバレンという名前が有利に働き政界での地位は急上昇、内閣でのポストを早く手に入れた。第3次ソールズベリー内閣の海軍卿（1895～1900）、大蔵財務次官（1900～02）、バルフォア内閣の通信長官（1902～03）、蔵相（1903～05）を歴任した。彼は1911年に保守党の党首に推されたが、政党の統合のためにボナー・ローにその地位を譲った。第1次世界大戦の勃発によって、彼はロイド・ジョージの戦時内閣にインド事務相として入閣し、戦後ふたたび蔵相（1919～21）となった。1922年10月19日ロイド・ジョージ政権に不満を懐いていた保守党の議員が、カールトン・クラブ（Carlton Club, 保守党本部）に集まり、ロイド・ジョージの連立政府を支持し続けるかいなかの議論をし、投票により不支持を決定した。オースティンはロイド・ジョージの連立政権を支持することを主張したがために、保守党での彼の主導権は失われ、首相になるチャンスを逸したのである。

オースティンと保守党を隔てていた深い溝は第2次ポールドウィン内閣に外相（1924～29）として入閣したときに埋められた。オースティンはロカルノ条約（1925）締結で中心的役割を演じた。オースティンの数々の業績と努力が認められて彼はノーベル平和賞とガーター勳爵士（K.G.）を授けられた。

1929年におけるポールドウィン内閣の崩壊は、オースティンの政治生命の終結を画期づけた。挙国一致内閣に海相（1931）として入閣したが、その年の総選挙の後に平議員に退いた。それは弟ネヴィルに大蔵大臣の職を譲るためであった。1935年に失敗に終わったホーア・ラヴァル計画Hoare-Laval Pact (Plan)の政治的瓦解の後に、ポールドウィンによってオースティンは外相になるよう要請されたが、それを断った。彼は弟であるネヴィルの政治的経歴の成功にその慰めをえていた。1937年3月16日のオースティン・チェンバレンの死は弟ネヴィル・チェンバレンがポールドウィンの後をついで首相になるまさに数ヶ月前であった。

オースティン・チェンバレンには公的側面におい

て絶えず父ジョセフ・チェンバレンと比較されて不利な面が付きまとっていた。父と子は外貌や服装面ではもちろん著しい類似性があったが、オースティンは父ジョセフの政治的野心や老練さにおいてははるかに及ばなかった。オースティンは彼の義務や忠誠心については注目されたが超然としたところや尊大さが彼を首相に上り詰めるのを妨げた。大物としての道が開かれながら、オースティンは期待に十分こたえることが出来なかった。

Series Three : The Papers of Joseph Chamberlain, 1836.7.8 ~ 1914.7.2.

ジョセフ・チェンバレンはオースティン・チェンバレン卿とネヴィル・チェンバレンの父である。彼は父の靴製造業を手伝った後、バーミンガムで螺旋製造業を営んで(1854~74)産を成した。社会改良に関心をもち、労働者の教育に尽力、急進的見解を懐くようになった。バーミンガム市長に選ばれ、街路・衛生の改善、ガス・水道の市営などバーミンガムをもっとも整備された都市たらしめ市民生活の向上に努めた(1873~76)。ジョン・ブライトの同僚として下院議員に選ばれ(1876)自由党急進派を率いた。第2次グラッドストーン内閣に商務院総裁(1880~85)となり、内政については急進論、外交については国家主義を唱えた。第3次グラッドス

トン内閣に地方行政院総裁(1886)となったが、アイルランド自治法案に反対して辞職、自由党の分裂を引き起こした。カナダ漁業問題について交渉するためアメリカに派遣され(1887~88)帰国後正式に自由党を脱党、自由統一党(Liberal Unionists)を率いた。第3次ソールズベリー内閣に植民相(1895~1903)となり、帝国の団結強化に努め、南アフリカにおけるボーア人の反抗を屈服させ、第2次南ア戦争終結にあたり南アフリカを訪れ(1902~03)ボーア人との協定に成功した。辞職後、植民地に自治を認め、イギリスとより緊密にするために帝国特惠関税政策を強く主張し、保護政策に基づく関税改革を唱えて全国を遊説(1903~06)したために保守党の分裂を招き、バルフォア内閣は瓦解した。彼は憎しみ、愛、なかならず忠誠心についての感情をあらわにする激しい性格の持ち主で、自由党と保守党の両方とも分裂させている。チャーチルをして「嵐を呼ぶ」男と評さしめる所以である。またイギリスの政治的指導者の実績を評価・分類するために政治家や専門家が使用しているモデルの一人とされ、首相になれなかった最も著名な政治家のトップにあげられている。

なお、関連文献はそれぞれについて数冊以上出版されているが紙数も尽きたので省略する。

(経済学部教授 はらだ せいじ)